

学級経営を基礎にした授業づくりに関する研究

—OPPシートを活用した具体的実践を中心にして—

M10EP014

樋川 諒

1. はじめに

(1) 授業と学級経営との関わりから

小学校教育において、授業を行う上で学級経営はきわめて重要な要件となる。良い授業が行われる場合は、その前提として良い学級経営が行われていると言える。そこで、学級経営ではどのような指導が求められるのかを追究することは、学級担任の経験の無い自分にとっては大きな課題であると考えた。

(2) 授業力の向上から

教師の職務の多くは授業である。それは新任であってもベテランであっても変わらない。教師として教壇に立つ以上、充実した授業の指導力を身に付けていなければならないと考えた。

以上の二つの課題から理論研究と、実習校において学級経営をふまえた充実した授業づくりを目指した研究を行うこととした。

2. 本研究の目的

(1) 学級経営に関する知見および手法の獲得

学級経営の中で授業との関わりに視点を置き、様々な要件の中で、まず的確な児童理解と児童への働きかけに関する知見や手法を学び、児童の自主性を育成させる力を身につける。

(2) 充実した授業実践を目指して

児童の実態に即した授業構成や展開、さらに児童の授業の理解度や到達度を的確に把握して授業改善ができる力を身につける。ともしれば、日々授業を単調に繰り返すことが予

想される。そこで、児童の実態を的確に把握した授業実践をめざし、それぞれの授業を自ら振り返り分析し、改善していく力を身に付ける。

3. 本研究の構成及び方法

本研究を(1)学級経営に関する研究(2)授業づくりに関する研究という2つの柱を設定し、それを踏まえて(3)研究の結果と考察という構成でまとめた。

(1) 学級経営に関する知見及び手法

- ①学級観察(第4学年)
- ②資料・データ研究
- ③目標設定と振り返り・反省に関するOPPシートの作成と活用

(2) 授業づくりに関して

- ①1単元を通した授業実践(第4学年)
算数科「広さを調べよう」全10時間
- ②OPPシートを活用した児童の理解状況の把握と授業改善
- ③指導教員、実習校教員からの指導

4. 研究方法の概要

研究方法として以下の柱を軸にして行った。

(1) 学級経営に関する知見及び手法

①学級観察

所属した第4学年の1学級において、的確な児童理解を大切にしながらか、学級を観察し、学級経営や授業に関する手法を学んだ。

②資料・データ研究

指導教員及び実習校から学級経営、その中でも特に児童理解に関する様々な資料を提供

していただき、具体的な手法の研究を行った。

③目標設定と振り返り・反省に関する OPP シートの作成と活用

今年度は4月から「目標設定および振り返り」に関する実践を【1年間のあしあと】という OPP シートを用いて行ってきた。限られた実習時間の中で、学級経営に関する実践を行うことは難しいが、この OPP シート（図1参照）を用いることで児童理解や児童への働きかけを行うこと、児童の自主性や目標に向かって努力していく力を育むことができると考えた。

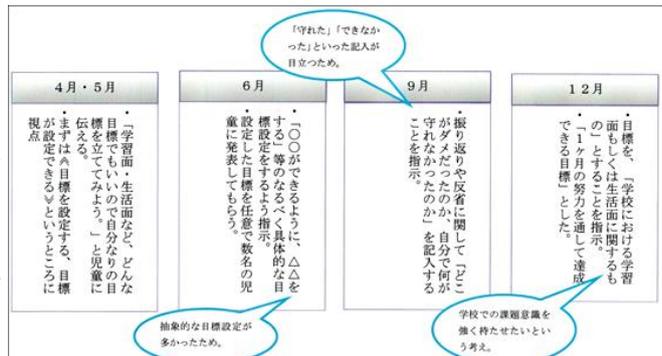


図2 1年間のあしあとの流れ

(2) 授業づくりに関する研究

① 1単元を通じた授業実践

昨年度までは単元の一部を担当させていただいていたが、今年度は、算数科の「広さを調べよう」の単元の全10時間を授業させていただき、1単元を見通した授業実践ができた。

② OPP シートを活用した児童の理解状況の把握と授業改善

昨年度と同様に、授業を行うにあたり OPP シートを作成した。毎時間の授業後に児童は、その授業のタイトル及び「1番大切であったこと」を OPP シート（図3参照）に記入する。そこから児童の授業による理解を読み取り、授業の改善へとつなげることができた。



図1 学級経営で使用した OPP シート
(児童 Y・O 男)

この OPP シートにおいては、児童が年間を通しての目標、そして各月ごとの目標を設定する。そして、月末・年度末に振り返りや反省を行うといったものである。児童の設定目標や振り返りに対し、教師（私）はコメントを書き込む。ここで大切なことは、児童の目標や振り返りに対してのコメントが、児童の次の目標や振り返りに反映するものでなければいけないということである。以下、工夫及び児童に指示した点（図2参照）である。



図3 授業で使用した OPP シート（児童 H・K 女）

5. 学級経営に関する研究の結果と考察

(1) 学級観察からの知見

所属学級は第4学年の1学級である。学級観察から学級担任の学級経営における、児童への働きかけをはじめ、学級経営の具体的取り組みについて、以下三つの知見を得た。

① 生活面の知見

児童が企画・運営したり友達と協力してできるような班活動やグループ活動を積極的に行うことや、学校生活に対する課題意識を常に持たせ、自分の行動を振り返る時間を十分に確保するといった取り組みが重要であることがわかった。

② 学習面の知見

小集団や学級全体での意見交流などの学習形態の工夫や、学びの履歴が残るようなノート指導、基礎基本を定着させるための繰り返し練習等が有効であることを学べた。例えばノート指導であるが、単元の終わりごとに児童自らがその単元における要点を見開き2ページでまとめるという取り組みが行われていた。そして、ノートのまとめ方が上手な児童数名のノートのコピーを教室内に掲示し、効果を高めていた。なお、児童を褒めながら指導を行うことがとても大きな成果になることも学べた。

③ 双方に関わる知見

学習面・生活面に関わることとして、話し方のルールや声の大きさ、話の聞き方のルールなどのルール作りも学級経営の中でしっかりと指導することが求められる。

このような指導の成果は普段の生活はもちろん、授業の中においても児童の言動にはっきりと表れてきていた。このことから授業の充実度に学級経営が大きく関係していることが実感できた。

(2) 資料・データ研究からの知見

指導教員及び実習校から学級経営、その中でも特に児童理解に関する様々な資料を提供

していただいた。児童理解は日々の生活や活動場面からの理解、そして収集された資料や情報からの理解といった多角的な面から行っていく必要があることを学べた。児童理解の具体的資料としては、指導要録をはじめ、児童理解表(家庭環境調査票)、健康調査票、前担任による申し送り、学級編成時の資料、標準学力テスト(CRT)、学級集団調査票(QU)などである。実習校に御協力をいただき、様々な資料を拝見する中で児童個々の理解の手法を実体験できた。

(3) 目標設定と振り返り・反省に関する OPP シートの実践

① 実践から見とる児童の変容

(ア) 目標設定や振り返りが着実に進歩している児童

この児童(図4参照)は、自己における課題を少しずつ見出せるようになってきている。そのため、取り組み始めの「〇〇をしたい、がんばりたい」といった抽象的な目標設定から、「〇〇なので、□□をする」といった目的のある目標設定が行われてきているのがわかる。また、児童の振り返りや反省で、目標に対して目標設定前後を比較し、どの程度達成できたか等の分析が記述からうかがえる。

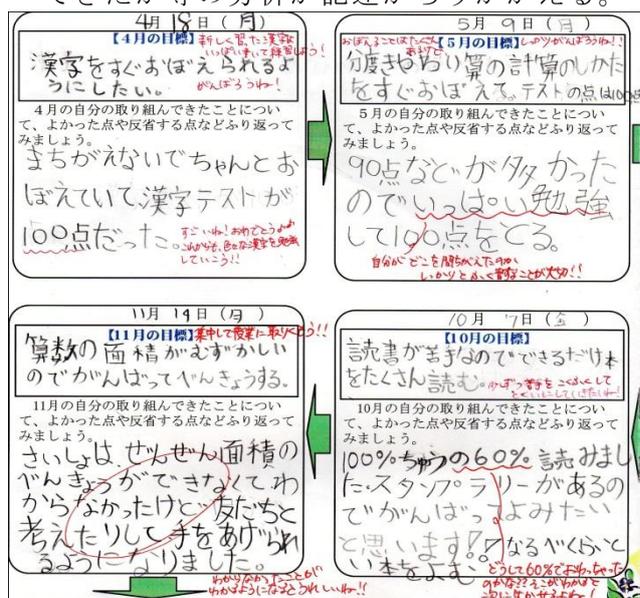


図4 児童C・H女の履歴

(イ) 働きかけの効果が表れない児童

この児童（図5参照）は抽象的な目標設定が続いている。コメントするにあたり、「目標達成のためにはどうしたら良い？具体的にはどんなことかな？」といった働きかけを行ってきているがあまり変化は見られない。また、振り返りについても、出来たか出来なかったといった記述の仕方であり、具体的に自己を振り返り記入することが出来ていない。「なぜ出来なかったのか？どこがダメだったのか？」といった記述がみられるよう今後も働きかけていかなければならない。

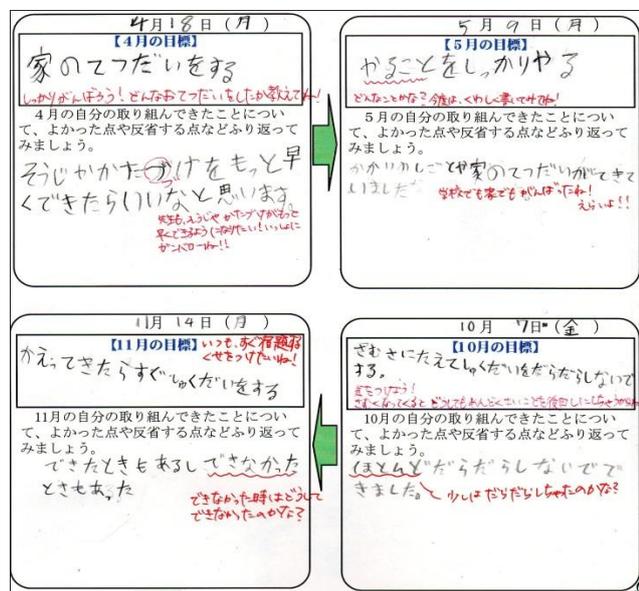


図5 児童D・K男の履歴

(ウ) 目標設定や振り返りが困難な児童

この児童（図6参照）は普段から気になる児童である。集中力に欠けるところがあり、目標設定や振り返りを行う際も短時間でさっさと記入してしまう。そのため、目標に具体性がなく振り返りや反省が記入できないといったことがうかがえる。目標設定や振り返りの際、個別に「今月は特にどんなことを頑張りたい？」「目標はどれくらい守れた？」という

ような指導を行ってきてはいるが、その効果が表れていない。今後もこのような児童への指導をなお一層の研究課題としたい。

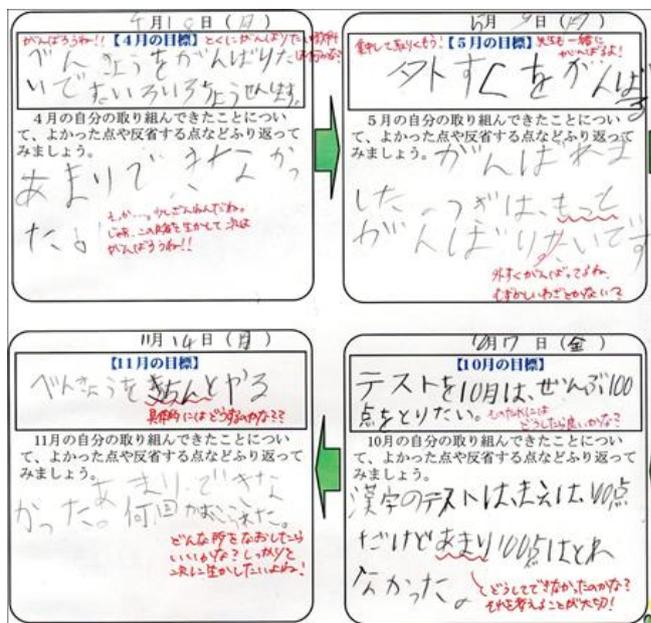


図6 児童K・O男の履歴

② 目標 OPP シートの授業への活用

児童の目標の中には、授業または学習に関するものが多く見られる。例えば、「勉強が難しくなってきたが、授業中しっかりと話を聞き頑張る」や、「授業中〇回以上発言をする」といったものである。これらは個人の目標であるが、授業内において児童に声かけとして活用することが出来る。個人の目標から学級全体への働きかけへとすることは有効である。

③ 目標 OPP シートに関するアンケート結果

これまでの実践について、児童にアンケートを行った。取り組み始めたときの気持ち、取り組んでみて感じたことなどを素直に記述してもらった。図7は2名の児童の記述である。

沿って適切に行わなければならないが、主発問を整えておくことで、臨機応変の発問も授業の軸からぶれないものとなってくる。昨年授業中の課題の一つとなっていた「間のとり方」も余裕が持てるようになってきた。児童とのやり取りをしっかりと行う中で、確実に授業を進めることが出来るようになってきた。

(2) OPP シートによる授業前における児童の素朴概念の抽出

授業を行う前に、単元の本質となる部分に関する問いかけを児童に行った。これにより、授業前に児童がどのような素朴概念を持っているかを抽出することが出来た。

児童に問いかけたのは、周りの辺の長さの合計が同じ長方形と正方形2つの図形を示し、どちらの方が広いかといった問題である。結果は以下のとおりである。

- (1) ②が広い 1名
- (2) ①が広い(理由が不明確) 5名
- (3) どちらも同じ(図8参照) 19名
- (4) ④が広い(理由が明確) 6名

これらの結果から児童の多くは、辺の長さの合計に注目し、広さを考えていることがわかる。そのため(3)の回答が大半となったと考えられる。

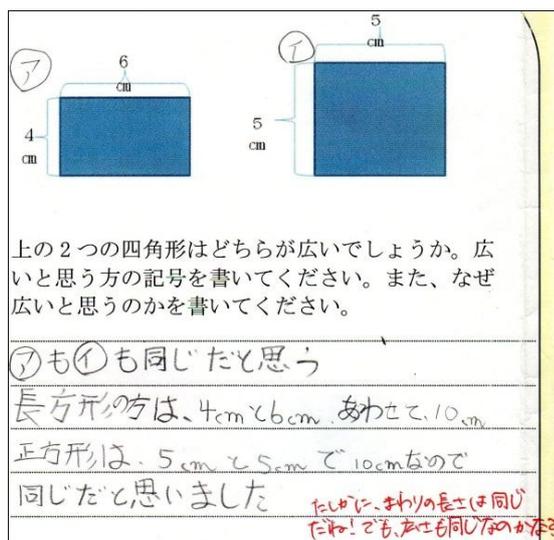


図8 児童の素朴概念 (児童N・I女)

(3) OPP シートを活用した児童の授業の理解把握と授業改善

毎時間の児童のOPPシートへの記入から、その授業におけるポイントを押さえられていたか確認を行い、授業改善をした。

① 授業におけるポイントの抽出

授業前に指導者である筆者は自身のOPPシートに本時のポイントを以下(図9参照)のように記入しておく。このように毎時間のポイントとなる部分を授業者として事前に整理しておくことで、焦点の定まった授業を行えるよう心掛けた。

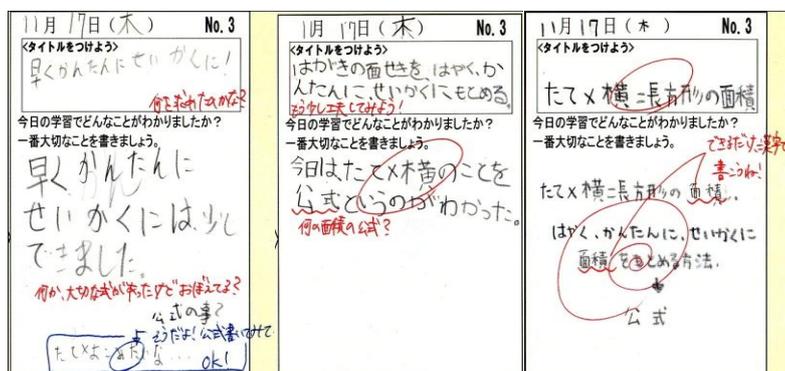


図9 授業者の記述した学習履歴

この筆者が意図したねらいに対し、児童が記入したシートに見られる児童の理解との差が多く生じた場合、授業内におけるポイントが不明瞭であったということになる。児童の理解が不十分であれば、次時において前時の内容の復習を導入として取り入れる必要がある。

② 学習履歴による授業の適切性の評価

例として、研究授業を行った第3時における児童のOPPシートは次のとおりである。本時は、はがきを教具として用い、「はがきの面積を早く簡単に正確に求めよう」という課題設定のもと、小さな正方形を基準にいくつぶんかを考え、長方形の面積の公式を求めていく内容である。

以下に示すものが第3時における児童3名のシートの記述（図10参照）である。左から児童A、B、Cとする。

の復習を取り入れるなどして修正や改善を行っていく必要がある。本実践においても何度かそのようなことがあったため、次時の展開を立て直すことが求められた。

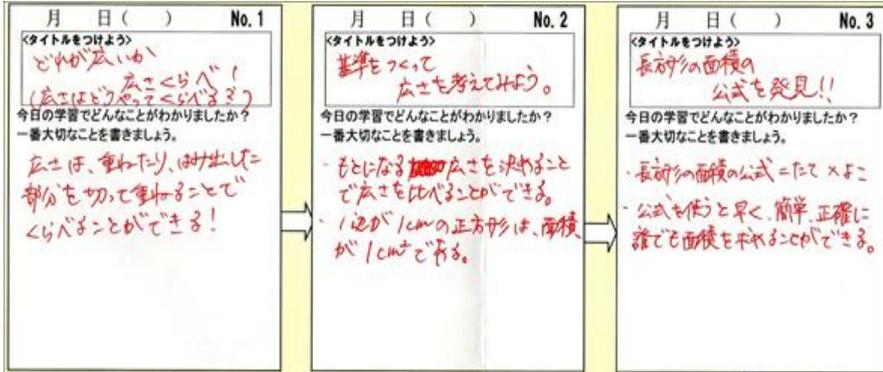


図10 同一授業での児童3名の学習履歴

また、前時の授業についての振り返りをOPPシートを用いながら行った。ポイントをおさえられていた児童数名に、シートの記述を発表させ全体に働きかけた。

③学習後の授業の適切性の評価

単元を学習後、学習前と同一の単元の本質に関わる問いかけを行った。学習者である児童の素朴概念の変容の結果は以下（図11参照）の通りである。

授業者として本時におけるポイントを前掲のOPPシートのとおり2点とした。

これに対し、児童Aは「早く簡単に正確には少しできました」との記述で、公式やどんな形の面積の求め方であったかは記述されていない。児童Bは「たて×よこ、という公式」との記述にとどまり、何を求めるものかが記述されていない。児童Cは筆者が記述したものとほぼ同様の記述が見られることから本時における内容とポイントをしつかりと理解していたと捉えることができる。

これらの記述から児童の授業への理解度を判断する材料の一つであることを学べた。児童Aのように、筆者が公式についての質問をコメントすると、次時においては公式をしつかりと記述し返答してきた。単に上手く文章にすることができなかつたことも考えられるのである。そのため、シートへの記述が向上していくような働きかけも重要となってくる。

この第3時の授業においては、児童のシートの記述から多くの児童が授業内容を理解していたと仮定したが、次時の導入において再度、前時の教具等を用いて長方形の公式について簡単な振り返りと確認を行った。授業内容について多くの児童が十分理解していないと判断できた場合、次時において前時の内容

- | | |
|------------------|-----|
| (1) ㉠が広い | 0名 |
| (2) ㉡が広い（理由が不明確） | 1名 |
| (3) どちらも同じ | 0名 |
| (4) ㉡が広い（理由が明確） | 30名 |

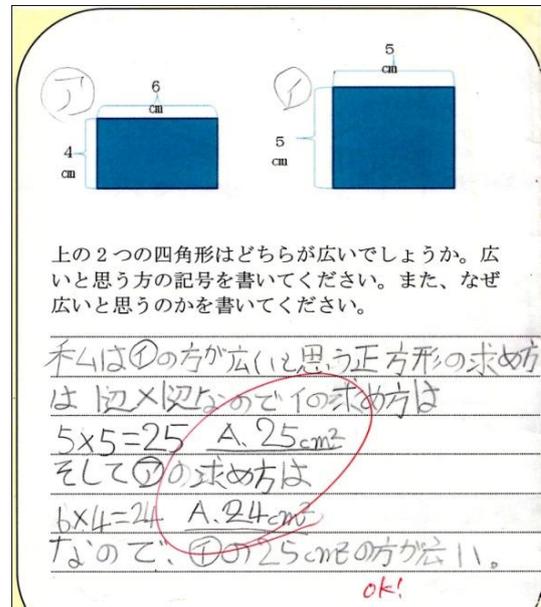


図11 学習後の児童の理解（児童N・I女）

この結果から、ほぼすべての児童が正方形や長方形の面積の公式を用い、広さを比較できたことから、適切な授業を行うことができたと考える。しかし、1名の児童に

関しては学習前と同じ思考である。今後そのような児童への個別の対応が必要となってくる。

(4) 指導教員および実習校教員からの指導による授業改善

本実践における多くの授業を、指導教員をはじめ実習校の諸先生方に見ていただき様々な指導をいただいた。頁数の関係上その中の2点、①児童の発言をいかに授業の中で生かすか、②授業展開の適切な時間配分についての課題を次のようにまとめた。

①児童の発言の活用

発問に対して発問の趣旨から少し外れた答えが返ってきた時、その発言を安易に聞き流してしまう場面が何度かあった。しかし、その児童の発言は決して的外れなものではなく、授業内容を深めることに生かせる発言となる。児童にとっては、発言が認められることで意欲へとつながっていくことにもなる。児童の考えや意見といった発言等の扱い方をさらに研究していく必要があり今後の課題としたい。

②授業展開の時間配分

授業展開の時間配分であるが、本実践の多くの授業で授業時間を超過してしまった。45分という時間の中でいかに授業を簡潔かつ的確な内容にまとめることができるかも課題の一つとしたい。さらに、授業展開においてメリハリをつけた展開をしていく必要もある。今回の実践では、丁寧にポイントを落とさないように授業することに意識が向きすぎてしまい、メリハリのない淡泊な授業となってしまった。しかし、1日の日課で6時間の授業を行うことから各1時限の授業は45分内に完結できる力を身に付けていきたい。

(5) 授業実践及び改善に対する示唆

今回初めて1単元を通した授業づくりを行った。これまでの単元における一部分を担当する授業とは異なり、単元全体を見通した授業づくりは経験がなく大変ではあったが、良い機会となった。

授業づくりの上で大きな要素となるものを昨年度抽出し、今年度は実践を通して検証することができた。とりわけ、児童の理解や実態をしっかりと把握した授業を行うことがとても重要であると感じた。そのためには、児童の理解度を判断するための手段が必要となる。このことはまず、OPPシートを用いることによって児童の理解度の概要を把握することができ、それをもとに授業の修正や改善を行っていくことが可能であることを体験した。しかし、前述したように、OPPシートの記述のみによって児童の理解度をすべて判断することはできない。発達段階を考慮することも求められる。あくまで児童個々の理解度を把握する際の資料の一つとして有効に活用していくことが望ましいのではないだろうか。今後は、シートへの記述の質が向上されるような働きかけを行っていくことが研究課題である。

さらに、コメントによる児童個々への働きかけをはじめ、全体へも記述の適切な指導内容や方法も重要な研究課題としていきたい。

7. おわりに

充実した授業を行う前提として、学級経営における日々の指導の継続した積み重ねがとても大切であることも実感できた。本研究において、学級経営で取り組まなければならない要素や要件、さらに方法などについて多くの知見を得ることができた。授業づくりにおいても、昨年度の5年生の学級と、今年度の4年生の学級においての実践を通して多くの体験をし、知見を得た。また同様に、多くの課題も新たに出てきた。それらの課題一つひとつについても解決に向けた研究に取り組み、今後、教師力向上のための素地としていくつもりである。

8. 参考文献

堀 哲夫『一枚ポートフォリオ評価 理科』
日本標準
小学校学習指導要領解説算数編. 平成20年.
文部科学省